暮まで

行淳之介

新潮社

© Junnosuke Yosiyuki 1978, Printed in Japan

夕暮まで

昭和五十三年九月十日発行
昭和五十四年三月三十日二十一刷

著者　吉行淳之介
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
162 東京都新宿区矢来町七十一
電話業務部(03)二六六一五一一一
編集部(03)二六六一五四一一
振替　東京四一八〇八

印刷　塚田印刷株式会社
製本　大口製本株式会社
製函　日本紙パルプ商事
定価　九〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目

次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一章　公園で　7
二章　網目のなか　21
三章　傷　61
四章　夜の警官　83
五章　血　95
六章　すでにそこにある黒　119
七章　夕暮まで　133

装丁　前川直

夕暮まで

一章　公園で

大型バスが走っている。鋪装された道が一本、真直につづいていて、その左右はひろびろとした野原である。ところどころに、人家がみえる。やがて、海が見えた。その海はしだいに迫ってきて、道のすぐ下が波打際になった。波が砕けて、白く飛び散る。

人家の密集地帯があらわれてきて、道はその中を貫いている。家々の陰に、海が隠れた。魚のにおいが、車内に漂った。停留所に二カ所停まり、バスはふたたび海のみえる道に出て、大きく左へ曲り、しだいに海から遠ざかった。

魚のにおいが消えた。バスの乗客の大半は、これまでに停まった二つの停留所で降りてしまった。乗りこんできた客はない。入口の扉の傍の席に、若い女が一人と、奥の席に中年の男が

一人座っているだけになった。

その若い女が立上って、バスの振動に足をすこし縺らせながら、奥の席に歩み寄った。男の傍に、並んで座った。女車掌が、おや、という眼を向けた。いままでは、離れ離れに、他人のような顔で座っていた二人である。

若い女は、小柄で少女のようにもみえ、男とは親娘ほど齢が離れている。

「もうかまわないね、魚のにおいがしなくなったから」

男が言い、女が答える。

「ごめんなさい、かまいはしないんだけど、でも……」

「いや、やはり注意したほうがいい。噂になると、厄介だから」

さっきバスが通り抜けてきた、海の傍の町に、女の知り合いの家が幾軒かあった。見られることを、女が恐れた。人目を恐れる気持さえなければ、二人並んで話し合っていても、不審を起させる組合せではない。しかし今となっては、そういう気持を剝して、取り去ってしまうことはできない。

女車掌が訝る眼を向けるだけの気配が、二人を取巻いてしまっている。

車内燈が、黄色くともった。日暮が近いが、窓の外はまだ薄明るい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

バスが燈をともして間もなく、終点についた。終点といっても、町があるわけではない。また、車庫もない。乗ってくる客もなく、バスはゆっくりと向きを変えると、走り去ってしまった。取残された二人の前に、平たい地面のひろがりがある。その地面は、三百メートルほど先で尽きて崖になり、その向うには一たん消えた海がまた姿を現わしている。

「こんなところなのか。これが公園なのか」

と、男が言った。

「こんなところなのよ」

「誰もいないじゃないか、なぜバスがここまで来るんだろう」

「夏になれば、もっと人が来るわ。でも、人がたくさんいればいいとおもっていたの」

「いや、誰もいないほうがいい」

日暮だが、空は夕焼けてはいない。平たい地面のところどころにある木立は鼠色である。崖の上の平地が公園としてつくられていて、眼の前にはコンクリートの門と柵があるが、それも鼠色である。海も鼠色だが、それは光を含んだ色で、公園全体が薄明りの中で逆光の景色になっている。

崖の上の地面をおおう薄紫色の空気の層は、まるで電気を帯びているように皮膚の上にかす

かに放電してくる……、と男はそうおもった。どこか違う世界に、まぎれ込んでしまったようだ。

「でも、なぜこんなところへ来る気になったの」

と、女が訊ねた。

「べつに……」

「理由がなくて、わざわざバスに乗って来るものかしら」

「車を運転してきたかったんだが、バスでなくては困る、ときみが言ったんだ」

「そのことは、そうだけど」

「きみと会うと、いつも部屋に入ってしまう。軀と軀とがくっついてしまう。そして、同じことの繰返しになる。それが困るとおもってね」

「困るといっても、もう手遅れだわ。佐々さんのために、もう結婚できなくなったのだもの」

「佐々さんとは、ずいぶん他人行儀だね」

「他人行儀にしたいのでしょう。そのために、わざわざここまで来たのでしょ。でも、もう遅いわ、あなたがはじめての男よ。もう結婚できないわ」

「いまどき、古風なことを言うね」

「古風じゃないわ。それが本当のところなんだわ。みんな、自分で自分を騙しているのよ、男も女も」
「自分が騙せないのなら、相手を騙せばいい、結婚する相手の男を」
「あなたは、騙すことばかり考えているのよ、なにもかも」
その声に嫌悪がこもり、男はふっと女の顔を見た。
「ともかく、中に入りましょうよ。どうせきたのだもの。すぐに夜になってしまうわ」
顔を正面に向けたままで、女が言った。
薄明るさが、薄暗さに変ってきた。公園の門や柵の輪郭が、にじみ出している。しかし、薄紫色の空気は、そのまま空間に漲っていて、女の目も鼻も口も、その表情も、はっきりと見えている。
公園の門をくぐった。番人の影もみえない。門から一直線に、地面の尽きるところまで、鋪装路が伸びている。その路の面が、白く浮び上ってみえる。そのほかは、平べったい地面とところどころの木立があるだけだ。
「この道の突当りまで、歩いてみるか」
男が言い、二人は並んで歩き出した。拓けた場所なのに、鋪装に当る靴の音が、反響するよ

うな、こもった音をたてた。空はほとんど黒くなっているのに、依然として薄紫色の空気は男の背の三倍ほどの高さで地面を覆っている。そのひろがりには、天井や壁があって、音が撥ね返ってくるような錯覚が起る。

ゆっくり歩きながら、男が気乗りしない声で、

「厭な夢をみた」

と、言った。

女は黙っている。男は一瞬ためらってから、言葉をつづけた。

「きみが、誰か知らない女と手をつないで、泣きながら歩いていた。二人とも、黒いブーツを穿いていた。連れの女は、きみを慰めているわけではなく、白っぽい表情をして、ただ手をつないで歩いている。泣いているのは、きみだ。顔の半分が、潰れた熟柿のように、朱色にぐちゃぐちゃしていた」

しばらく黙ったまま、女は歩いていたが、

「その連れの女って、背が高くて、腫れぼったい目蓋をしていなかったかしら」

「そのとおりだが……」

「佐々さんの見たのは、夢じゃなかったかもしれなくてよ」

「そんな馬鹿な」
「だって、熟柿のように朱色だとか……、色が着いているじゃないの」
「ぼくの夢には、色があるんだ。中間色まで、はっきり着いている」
「そうね、色の着いている夢って、あるわね……。でも、それ、夢じゃないわ。あたし、そんな風にして、歩きまわったことがあったわ」
そう言いながら、女は左手を上げ、掌で顔の左側を覆った。男は、女の右側に並んで歩いている。空はもうすっかり黒くなっているが、二人を取巻く空気の色はむしろ前よりも明るさを加え、女の仕草がはっきりと眼に映ってくる。
男は、有名な怪談を思い出した。坂の途中で、目も鼻も口も無いのっぺらぼうの男とすれ違った。吃驚して坂を駆け降りると、坂下に屋台のソバ屋があった。その屋台にころがり込んで、たったいま見たことを話すと、屋台の親爺がにやりと笑って、
「その男というのは、こんな具合でしたか」
と、片手でつるりと顔を撫でおろすと、目も鼻も口も無いのっぺらぼうになっていた……。
男は、傍の女の気配を窺っている。
「そのときの顔って、こんな具合だったでしょう」

と、女が言って、掌を離す。掌の下から出てきた顔の左半分が、朱色にぐちゃぐちゃに潰れている……。しかし、そういうことは起らず、女は掌を顔に当てがったまま、歩いてゆく。

男は、苛立って、言った。

「夢にきまっている。それはもう、分り切ったことさ」

「どうして、分り切ったことなの」

「自分で見た夢なのだから、夢だということは確かだ」

「そうかしら」

疑い深い口調に、男は一層苛立って、

「夢だという証拠がある」

「証拠……」

「きみも、連れの女も裸で歩いていた。だから、夢だということは、はっきりしている」

「でも、黒いブーツを穿いていた筈じゃなかったかしら」

「ブーツは穿いていたさ。あとは、素っ裸だ」

わざとどぎつく、男は言った。それでも、女は口の中で、

「そうかしら」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.